

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	多様な関係づくり
目標（評価規準）	学級にとどまらない人間関係を多く体験させることにより、豊かな社会性を育てる	
重点に係る現状 設定理由	小規模校である本校は、その規模を活かしてこれまで学年を越えた交流を実践してきた、コロナ禍においては、これまで同様の取り組みが困難であるが、その中でも子どもたちに社会性を育てる学校の役割を果たしていくことが求められる。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	<ul style="list-style-type: none"> ・人と関わる力、集団と関わる力、社会と関わろうとする力の育成については、概ね良好であると捉えている。 ・社会とつながる力の育成については、全体的に良好であるが、その機会が十分に作れず課題となっている状況があると感じている。
各アンケート等の結果	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者、児童共に人と関わる力の育成については、概ね良好と捉えているが、児童によってはまだ十分ではないと感じている。 ・集団と関わる力の育成については、保護者、児童共に概ね良好であると感じている。 ・社会と関わる力の育成については、児童の一部に課題を感じている様子が伺えるが、全般的には良好と捉えている。
自己評価結果 (見解と改善方策)	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナの状況の中で、できる活動に制限があったものの、全体的には人との関りや集団との関り、社会との関りそれぞれにおいて、一定の取り組みを行うことができ、それが成果につながっている。 ・今後は、条件が許す範囲の中でさらに豊かな人間関係が育まれるような機会を増やしてい食ことが必要である。 ・課題としては、特に活動制限化においては人との関りがどうしても学校内に限定され、校外とのつながりについて実際に体験する機会を作りづらいことがある。条件が許すのを待つだけでなく、ICTの活用などを含めて、つながりを持つためのアイデアを模索していく必要がある。
学校関係者評価結果	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた条件の中で、子どもたちがよく社会性を身につけている。 ・条件に合わせながらも、コロナ前に剣崎小学校で行っていたようなより学年を越えたつながりが作れるような取り組みを工夫してもらいたい。
最終改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も本校の教育活動の柱として豊かな社会性の育成を据えていく。 ・小規模校である、本校の学年を越えたかかわりの中から育つ人間関係を、人との関り、集団との関りの両面から実感させていく。 ・学習が社会とのつながりを実感できるよう意識した授業作りに心がける。また、実際に社会との関りを体験できる機会を積極的に設けていく。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	基本的生活習慣の定着
目標（評価規準）	自分のことを自分でする、より良い判断・行動ができる児童を育てる	
重点に係る現状 設定理由	小規模校である本校は、全児童の指導を全職員で行うことを指導体制の基盤に位置づけている。 手厚い指導ができる環境にある本校は、一方で児童が課題に直面する場面や失敗する状況で先回りをした指導になりがちな面がある。児童の主体性を伸ばすために、児童との適切な距離感を保ちながら見守る指導力を学校として身につけていく必要がある、	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的生活習慣の定着については、概ね良好と捉えている。 ・ 規範意識については、概ね児童に身につけてきていると捉えている。 ・ 主体性については、概ね身につけてきていると捉えているが、改善の余地がありさらに取り組みを進めていく必要性を感じている。
各アンケート等の結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的生活習慣の定着については、保護者児童共に概ね良好であると捉えているが、一部の児童は、まだ身についたとの実感が感じられていない様子が伺える。 ・ 規範意識については、保護者児童共に多くが身につけていると感じているが、一部の児童は自分または、周囲の児童に課題があると感じている。 ・ 主体性については、多くの保護者児童が育ってきていると感じているが、課題意識を持っている児童も一定数いる。
自己評価結果 （見解と改善方策）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的生活習慣については、概ね身につけているものの、一部の児童には課題意識があることを認識する必要がある。学校、家庭どちらかだけで育つものではないという認識のもと、双方の十分な連携をとりながら進めていく必要があると考える。また、基本的生活習慣の主な要素について共有していくことも必要である。 ・ 規範意識については、概ね育ってきているととらえられるが、今後は単に頭で理解する善悪ではなく、自分たちの生活の中で体験やそこから生じる感情を意識化させる中で身につけていくことが必要であると考ええる。 ・ 主体性については、その概念が人それぞれで統一されてなく、具体的なイメージを共有していくことが必要である。共有化された主体的な行動の具体が積み重ねられ、その成果がさらに共有されていくような取り組みが必要である。 ・ 教師として必要なのは、児童が自分で考え行動しようとしている場面を、大人の経験の視点で先回りすることなく、特に失敗や紆余曲折の経験を重視し見守る姿勢を持つという共通理解が必要と考える。
学校関係者評価結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一部対応の面もあるが、全体的には概ね良好である。 ・ 児童の評価の背景には日頃大人にどんな声をかけられているかが影響していると考えられる。
最終改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童に、学校においてはあいさつや姿勢、持ち物、時間の管理等の習慣を、家庭では、寝起きやけじめある生活などの習慣が身につくよう、それぞれの役割を認識しながら家庭との連携を深める。 ・ 規範意識については、日常の出来事を題材にして学ぶなど、児童が実感を伴いながら身につけることができるよう工夫する。 ・ 児童が主体性を発揮でき、その実感をえられるような活動を増やしていく。職員は、児童に自信と粘り強さが育つような指導方法の向上を目指す。

本年度の重点	3	指導力の向上、適切な評価
目標（評価規準）	研修、研究、職員間の日常の研鑽を通して指導力の底上げをし、児童の学力向上に結び付	
重点に係る現状 設定理由	職員の多くが数年間の中で入れ替わる中で、本校が取り組んできた学力向上への取り組みが定着しにくい状況が生まれている。改めて現状の児童の学力の把握及び、これまでの学びの継続性について全職員が理解し今後の指導のあり方が共有されるようにしていく必要がある。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ意欲の向上については、概ね良好ではあるがまだ改善の余地があると感じている。 ・基礎基本、知識・技能、思考力・判断力・表現力の育成については、向上しているものの、課題も感じている。 ・学力向上に向けての取り組みとしては、取り組み自体は良好であるが、満足と言える状態ではない。より充実した取り組みの必要性を感じている。
各アンケート等の結果	<ul style="list-style-type: none"> ・児童保護者共に、意欲や基礎基本の定着については全体的に良好であると捉えている。しかし、一部の児童はまだ不完全であるととらえており、対応が必要である。 ・知識・技能や思考力・判断力・表現力の育成については、概ね良好ではあるが一部の児童が実感を持っていない様子が伺える。 ・授業の分かりやすさについては、全体的に肯定的である。
自己評価結果 (見解と改善方策)	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的には、授業に意欲的に取り組もうとしている児童の姿が感じられる。ただ、基本的な内容については、多くの保護者や児童が定着の実感を持っているものの、知識・技能や思考力・判断力になると、その実感が持ていない割合が増えている。 ・今後は、まず基礎基本の定着の再点検と、その上に重ねていく応用力の育成のあり方について指導方法を改善していく必要があると考える。 ・本年度は、職員全体で研究の方向性を基本に立ち返る形で取り組みなおした。また、学校づくりアンケートも教育計画の具体的な成果と課題が見やすい形に変更した。その結果、見えてきた本校の学力向上に向けての取り組みの方向性を全体で共有し、課題を一つずつ解決していきたい。
学校関係者評価結果	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に良好な結果である。 ・職員、保護者、児童それぞれに課題意識が見られる。学校としての今後の取り組みの方向性につながるものである。 ・児童の実態に合わせ、やる気や実感につながる学力向上に努めてもらいたい。
最終改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎基本の定着をより確かなものにする。 ・そのうえで、知識・技能、思考力・判断力・表現力が身につく、豊かになった子どもの姿のイメージを、より具体的なものとして職員全体で共有し、授業改善の材料とする。 ・本年度の研究を足がかりに、授業と評価の一体化につながる授業力向上に、職員全体で取り組む。